



愛隣幼稚園..... 園だより 13. 3月号

広く深く大きく豊かに

3月になってしまいます。ながれぼしの子もたちは今日も園庭に駆けこんでできます。「おはよう！」「おはようございます！」登園時間に遅れてしまったわけではありません。毎日、朝いちばんにクラスのみんなで約束があるわけでもありません。でも子どもたちは、不思議の国のアリスに登場するあの三月うさぎのように、「いそがしい、いそがしい」「時間が足りない」と言わんばかりに駆けこんでくるのです。なんだか、日々、その数も増えています。おうちの皆さんはそのあとを追いかけて、同じように駆けこんできたり、「先生、うちの子いきました？」と、あとから悠然と歩いていらっしゃる方がいたり。小学校に行ったら手を繋いで登校などということはないでしょう。だからあと少し繋いでいたかったその手ですが、子どもたちはひとりで自分の道を歩き出して（走りだして）います。

さて、今年も私たちは『子どもたちの自由なあそび』を大切にして、子どもたちとの園生活を創ってきました。それは子どもたちにとって容易いことではありませんでした。入園してまず最初にく何をしたいのかわからない>という困難に出会いました。与えられたもの、あそび方の決まっているもの、こうしなさいと指示されたもの、そういうものであそんだ経験はあっても、自分のやりたいことをみつけてあそぶという経験は少ないのです。おとなの発想と許容範囲の中で生活してきた子どもたちですから、何もできずに過ごす子がいます。手当たりしだい、何でもやってしまう子がいます。<何をしたいのかわからない>からです。さらに困難は続きます。<気持ちを伝える>という困難です。これがまた厄介で、自分の思いすら言葉で伝えるのは難しいのに、出会ったばかりのあいつの言ってることなんかちっとも分からない。分からないのに手が出て、足が出て、がぶっとされることもあったり。それでやり返したら泣かれちゃったり。<気持ちを伝える>のは難しいのです。さあ、軌道にのってきたと思う年中時代には、今度はくひとりひとり違うことをいいことと思う>という更なる困難に出会います。私があの子と違うことも、あの子が私と違うことも認め合って、それがいいと思えるようになるなんて、この時代の子もたちにできることなのでしょう。<違う>ということまでは分かります。だから突然、上手じゃないからと言って、絵を描かなくなったりするのです。おとなも同じ、他人と違う自分はわかりますが、うまくいかない自分も全部合わせていいと思うのはとても難しいことです。子どもたちが“自分はいい”と思えるためには、あそびを通して仲間の中で、ひとつひとつ自信につながる経験を積み重ねていくほかに方法はありません。これもまた時間がかかります。失敗しても待っていてくれる仲間、認めてくれる仲間、赦してくれる仲間、そんな仲間との出会いが“自分はいい”という実感を支え、それが土台となって初めて“あいつはいい”“みんな違っていい”と思えるようになるのです。違う仲間たちが、それを認め合って力を合わせてひとつの目標に向かう時、子どもたちの姿はおとなたちの想像を超えたものになります。運動会のリレーもそうです。「がんばれば、抜かされても、後で仲間がまた頑張ってくれるから大丈夫なんだよ！」そう言って最後まで全力で走った子どもがいます。たった数年の間に、彼はどれほどの出会いを経験したのでしょうか。彼もまた、前述した多くの困難に向き合っていました。その彼が自分を信じて、自分はいいと思えるようになりました。そんな自分をいいと思ってくれる仲間にも出会いました。そして何よりも、彼自身が仲間たちをいいと思い、心の底から信頼して6歳という時代を過ごしてきたのです。彼だけではありません。ながれぼし組の誰もが同じようにこの時代を生きています。こんなに豊かな心の世界を子どもたちは生きているのです。たかだか6歳の子もがなどと、侮ってはならないのです。子どもの心がいっぱい動いて、その世界は広く深く大きく豊かになりました。だからもしかすると、この先には耐えられない痛みを心に感じることもあるでしょう。それでも愛隣っ子には「自分を愛し、隣人を愛する」動く心の持ち主でいてほしいのです。その痛みは神様も共に背負ってくださるから、そう信じて歩いていってほしいのです。